午後の熱

尾上セイラ
Seira Onoue
Illust: Muku Ogura 小椋ムク

© 心交社

この作品は（株）心交社に帰属します。
無断複写・複製・転載を禁じます。

『ぜっったいにうまくいかないわ』
絨毯屋のソファーに陣取り、臨月の大きなお腹をさすりながら、不機嫌な様子を隠しもせずにライラが言った。
『だいたいね、三年もの間兄さまにメールすらしなかったくせに、今更よりを戻したいだなんて、虫がよすぎるのよ！』
どう返事をしたらいいのか困って、小日向仁は曖昧に笑顔を浮かべたままライラの話を聞いていた。
『兄さまも兄さまよ、三年も音沙汰なしだった相手を、よく許す気になったものだわ。それに――』
ライラの小言は一向に終わりそうにない。ライラの夫であるアリーが、接客しながら「すまん」という顔でこちらを振り返るのが見えた。
彼らと出会ったのは、三年前のことだ。
三年前、仁は亡くなった伯母の形見を、彼女の息子のユクセルに届けるため、北アフリカの小国、シャムスジャミールを訪れた。
この国へ来たとき、仁はユクセルの居場所すら知らなかった。それが、偶

然にもユクセル本人に危ないところを救われたのだ。
その後、いろいろあって、ユクセルとは男同士でありながら恋仲にまで発展したが、当時目の病気を患っていた仁は、ユクセルとの将来を悲観し、彼との関係を断ち切って日本へ帰ってしまった。
そんな仁に、何も言わず、ユクセルは伯母の形見の鍵を預けてくれた。
鍵はまるで「いつまでも待っている」というユクセルの気持ちの表れのように思えて、仁は何も打ち明けずに帰国したことを激しく後悔した。
それから、仁はこの国へ戻るために努力をし、そして三年後にようやく再会を果たして、今はユクセルのいるこのシャムスジャミールで暮らしている。
異国での生活はまだ始まったばかりだが、仁は幸せだった。
だが、ユクセルの腹違いの妹・ライラはそれが面白くないらしく、仁と顔を合わせるたびにこうして攻撃してくるのだ。
今は彼女の夫であり、ユクセルの親友でもあるアリーは、「マタニティーブルーだから気にしないでやってくれ」と言うのだが……。

『ちょっと、聞いてるの？』
眉をつり上げたライラがむっとしたような顔で聞いてくるのに、仁は我に返った。
『き、聞いてます……』
首を竦めて小声で答える。
その時、さっと入り口のドアが開き、明るい笑い声を上げながら、熱風とともにユクセルとかわいらしい少女が店に入ってきた。
『あっ！　ジンだあ！』
ユクセルと手をつないでいた少女は、仁を見るなりうれしそうな笑顔になり、彼の手を振り払って駆けてくる。
『ジン、だいしゅき！』
舌っ足らずな声でそう言いながら膝に抱きついてきた少女に、仁も相好を崩した。
『僕もサルマーが大好きだよ』
ふくふくとした頬をつつきながら言うと、サルマーはにっこりと笑った。

アラブ系美人であるライラの血を濃く継いで、幼いながらに目鼻立ちのくっきりした、整った顔立ちをしている。
金に近い栗色の髪の毛と肌の色は、父親のアリー譲りだろう。天使のようなカーリーヘアーが愛くるしい顔にとても似合っていた。
サルマーは今年二歳になる、アリーとライラの娘である。
仁がユクセルと離れていた三年の間に、二人は結婚した。その後すぐに第一子に恵まれ、その子がもう二歳。時の流れは速い、と仁は感慨深げにため息をつく。
『あのね、サルマーね、大きくなったらジンとけっこんするの！』
無邪気なプロポーズに、仁は微笑んだ。
サルマーは仁が殊の外お気に入りらしく、いつでも顔を見ると抱きついてきて、そんなことを言う。そう言ってくれるのは小さいうちだけだと分かっていても、やはり可愛いものは可愛い。
『うれしいなあ。じゃあ、僕、サルマーが大きくなるのを……』
『だめだ』

待ってるね、と言いかけた言葉を遮られ、仁は顔を上げた。
『サルマー、仁はもう俺のものだ。あきらめろ』
そう言いながら仁の隣に座ったユクセルが、これ見よがしに仁の腰を抱き寄せ、真剣な顔つきで言った。
『ちょっと、ユクセル、子供相手に何言ってるの？』
慌てて声を潜め、ユクセルをたしなめる。
しかし、ユクセルは不快そうに目を細め、鼻を鳴らしただけだった。
『……サルマーはジンとけっこんするのよ！』
まだまだ言葉はおぼつかないのに、嫌なことを言われたということだけは分かったらしい。サルマーは愛らしい頬を不服そうに膨らませて、そう言い募った。
『だ・め・だ。あきらめろ』
子供相手にムキになっているのか、ユクセルは仁の頭を引き寄せると、耳元に口づけてくる。
ちゅっ、っと音を立てて離れた唇に、仁は赤面した。

『ちょっと、兄さま！』
ライラが非難を含んだ声を上げ、慌ててサルマーを抱え上げる。
『子供に変なもの見せないでちょうだい！』
『変なものとはなんだ。親愛のキスくらい、誰とだってするだろう？』
『だっ、だからって、こんな人前で……！』
ライラと仁とで代わる代わる抗議の声を上げると、ユクセルは全く反省した様子もなく、肩を竦めて見せた。
『ほら、みんな店で何やってんの。サルマーが泣きそうになってるじゃないか』
呆れた声でそう言いながら、アリーが接客を終えて輪の中に加わってきた。父親の姿を見たサルマーが、半泣きになってアリーに抱きつく。
アリーはサルマーが可愛くてたまらないという顔つきになり、娘に頬ずりをした。
『ライラも、あんまり怒るとお腹の子に悪いよ？』
笑顔でそう言ってライラの隣に座り、いたわるように大きくなった腹部を

撫でる。
会話をアラビア語に切り替えて何やら話し出した家族は、この上なく幸せそうだ。
そっと隣のユクセルを見上げると、ユクセルは黙って彼ら家族の様子を眺めていた。
その表情から、彼の考えていることをうかがい知ることはできない。
こんなとき、仁はいつも少し不安になる。
愛されていることは分かっているが、自分が傍にいる限り、ユクセルには家族ができない。サルマーをかわいがっている様子から見ても、子供が嫌いなわけじゃないだろう。
ユクセルには、父親になりたい、自分の血を継いだ子を持ちたいという思いはあるのだろうか。だとしたら、自分の存在はいずれ彼にとって障害になるのではないだろうか……。
鬱々（うううつ）とそんなことを考えながらユクセルを見ていると、視線に気づいたユクセルと目が合った。

「……何だ？」
不思議そうに聞かれて、仁は慌てて首を振った。
「何でもないよ……」
そう答えて目を逸らし、俯く。
と思ったら、ユクセルの手が伸びてきて顎をとられ、仁は顔を上向かせられてしまった。
「何でもない顔じゃないだろう。何かあるなら言え」
頑に何でもないと言いかけて、仁は言葉を飲み込んだ。
いつも堂々としていて不遜な態度ばかり取る男の目に、微かに不安の色が浮かんでいるのを見てしまったからだった。
お互いに言いたいことを口にせずに呑み込んで、すれ違ってしまった三年間を思い出す。
もう二度と、あんな思いはしたくない。それはきっと、ユクセルも同じなのだろう。
仁は顎にかけられた手を取って、それをそっと両手で包み込んだ。

「……ユクセルも、子供が欲しいって、思う？」
不安を正直に口にすると、ユクセルは呆れ顔になった。
「何だ、そんなことを心配してたのか」
鼻で笑うユクセルに、仁はムッとして唇を尖らせた。
「そんなことじゃないよ。大事なことじゃないか」
「大事なこと、ね。で？　それを聞いて、俺がイエスと答えたらどうするつもりだ？」
仁はぐっと言葉に詰まった。
そうだと言われたら、どうすればいいのだろう。
ユクセルのために、彼との別れを選ぶべきなのだろうか。
「い、嫌だ……」
考えるよりも先に言葉が口を突いて出た。
ユクセルの手をぎゅっと握りしめて、「嫌だよ」と呟く。声が震えた。
「別れたくない。傍にいたい。こ、子供はできないけど、でも、僕……」
涙ぐみながら言うと、ユクセルは驚いたような顔をして仁を見つめ、それ

からふわりと微笑んだ。
「おい、想像で泣くな。どうして別れるだ何だという所まで発展するんだ。俺はまだ何も言ってないだろう？」
大きな手が、優しく頬を撫でる。
「でも……あの二人を見てたら、家族っていいなって思わない？」
「仁はそう思うのか？」
質問を返されて、仁は戸惑った。
サルマーは可愛い。幸せそうなライラとアリーを見ると、うらやましくなることはある。だが、だからといって、女性と家族を作ろうという気持ちには到底ならなかった。
ふるふると首を振ると、ユクセルは満足そうな顔になった。
「俺も同じだ。それに、今は……仁が俺の家族だろう？」
そう言いながら肩を抱き寄せてくるユクセルに、仁は目を見開いた。
「……家族って、思ってくれるの？」
「当たり前だ。俺は、もう仁を手放す気はないからな、覚悟しておけよ」

耳元でそう囁き、そのままそこにキスされる。うれしさと恥ずかしさが一気にこみ上げてきて、燻っていた不安はあっという間に霧散してしまい、仁は顔を赤くしながら明るい笑顔になった。
「……おい、そういう顔をするな。抑えが効かなくなる」
「へっ？」
きょとんとする仁の頬を軽くつねり、ユクセルは肩を抱いていた手を腰まで滑らせた。
ある意図を持った触り方に、背筋がぞくっとする。
「ちょ、ちょっと……だから、みんながいるところでこういうのは無しだってば」
小声で抗議するが、ユクセルはにやついているだけで何も答えない。そのうちに腰のあたりで遊んでいた手が背後に回り、するりと下の方に滑った。
仁はびくっと肩を揺らし、ユクセルを睨みつけた。
『ちょっと』
その時、ドスのきいた声が店に響き渡り、仁は飛び上がるほど驚いた。

声の主を恐る恐る見ると、案の上、ライラが恐ろしい形相でこちらを睨み付けている。

『家でならいちゃつくなりキスするなり好きにすればいいけど、外ではやめてちょうだい』

「は、はい」

慌ててユクセルを押しのけると、ユクセルは不服そうに鼻を鳴らしながらも、大人しく仁から離れた。彼も、公衆の面前でこれ以上はできないとちゃんと弁えているのだろう。

『全く、兄さまも、仁なんかのどこがいいのよ……』

相変わらずぶつぶつそんなことを言ってはいるが、彼女が、大好きだった兄を取られた腹いせでそんなことを言っているというのは、仁にも分かっていた。

無理矢理引き離そうとしたり、冷たく無視されたりということはないのだし、本心ではライラも二人の関係を認めてくれているはずだ。渋々かもしれないけれど。

だからこそ、愚痴くらいは付き合ってもいいかなといつも思ってしまうのだ。

苦笑しながらライラの文句を聞いていると、そっとユクセルの手が伸びてきて、仁の手をぎゅっと握った。

「おまえは、俺のものだからな」

念押しするような、そんな小さな呟き。

そっと恋人を見ると、燃えるような眼差しが仁を見つめていた。

今はまだ始まったばかりでも、この関係は、きっとずっと続いていくに違いない。

そんなことを思いながら、仁は頷いて、ユクセルの手をぎゅっと握り返した。

（終）